

CHeRRY blossom

@ぶくう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

三年生の卒業を祝う、卒業ライブを行うこととなつた静真高校スクールアイドル部。  
サクラが舞い散る季節、最後に贈られた曲は――  
※劇場版後、一年が経過しています。

C  
h  
e  
R  
R  
Y

目

b  
l  
o  
s  
s  
o  
m

次

|

1



# Cherry blossoms

三月、それは春の息吹を感じる季節。

三月、それはお世話になつた先輩に別れを告げる季節。

三月、それは満開の桜が舞い散る季節――

「でも、ついに私たちも卒業か……」

「この一年、色々あつたねえ」

「あはは、なんかおばあちゃんみたいだね」

そう談笑しながら、控室として使つていた教室から講堂へ向かうのは静真高校三年、Aqoursのメンバーである私、桜内梨子と、高海千歌ちゃん、渡辺曜ちゃん。卒業式を目前に控えた今日、静真スクールアイドル部の卒業ライブが講堂を貸し切つて行われていた。

「でもやっぱりすごいなあスクールアイドルって。あんなおつきな講堂に、お客様満員だつたもん！」

「静真の講堂が埋まるのはやつぱり圧巻だね！」

卒業ライブは二部構成で行われた。第一部は一般公開され、あの「A q u o r s」メンバーが三人も卒業するということもあって、決して狭くはない静真の講堂は文字通り満員御礼の大盛況だった。

「六人でやつた部活動紹介はちょうど一年くらい前だつけ」

「あれは部活動説明会だつたし、そもそもああいう空気苦手なんだよなあ」

私たちは、懐かしいね、と笑いあい、そして自然と足が止まつた。校舎の外からは運動部の威勢のいい掛け声が聞こえてくる。

「……終わつちやつたんだね」

沈黙に耐えかねた曜ちゃんがポツリとつぶやいた。

「……曜ちゃん、それは言わない約束でしょ？」

「ごめん……」

曜ちゃんを窘める私だつたけれど、自分の目に少し涙がたまつてているのがわかる。曜ちゃんは唇を軽く噛んで、そう答えた。

「まあまあ梨子ちゃん。実際今日が私たちの最後のライブだつたわけだし、曜ちゃんが

「千歌ちゃんまで……」

少し苦笑いを浮かべた千歌ちゃんが私たちの間に割って入った。

卒業ライブの第二部はアフターパーティ形式で部外者完全非公開。スクールアイドル部の在校生が、卒業生に歌やダンスを贈る形で行われる。つまり、私たち三年生のスクールアイドル活動は、先ほど終わった第一部で本当に幕を閉じたと言つてもいい。

「でもね、私、ちょっと嬉しいんだ」

でも、その湿っぽい空気を吹き飛ばすように、千歌ちゃんは晴れやかな顔でまっすぐ廊下の先を見つめていた。そのままなぎしは、あたかもそこに何かを見つけたかのようだつた。

「……嬉しい？」

私は少し遅れて、答え合わせをするかのようにそう尋ねる。

「うん。私ね、やつと果南ちゃんたちの気持ちがわかつた気がするの」

きつと千歌ちゃんの目には、その視線の先には、ずっと背中を追い続けてきた先輩の姿が見えているのだろう。つらいことや悲しいこと、嬉しいことや楽しいこと、酸いも甘いもいっぱい教えてくれた先輩の、その後ろ姿が。やつと、追いついた。そんな気持ちがじみ出しているのが、傍から見ている私にも伝わってくる。

「……千歌ちゃんの言うこと、わかる気がする」

続けて口を開いたのは曜ちやんだつた。

「去年は、いてもたつてもいられなくて、このままでつと一緒にいたい！ って思った時  
もあつたけど、鞠莉ちゃんたちが『私たちの事なんかほつといて、新しいA q u o r s  
を始めなさい』って言つてくれた意味、そのホントの意味が、ようやく分かつたかも」

曜ちゃんもつられて千歌ちゃんの見るその視線の先を見つめる。

「あはは、ほんとだね」

「……ちよつと、遅すぎたかな」

二人は見つめあつて、互いにばつが悪そうな顔をしている。私はそんな二人を見て、  
ああ、やつぱりあの三人には敵わないな、と小さくひとりごちた。

「……もう、一人とも。早く講堂に行くわよ。みんなを待たせるんだから」

悔しかつた私は、わざといたずらっぽく笑つて見せ、一人を追い抜く。

「あ、梨子ちゃん待つてよ……！」

千歌ちゃんと曜ちゃんが慌てて追いかけてくる。私はそんな二人に追いつかれない  
よう、まつすぐ廊下の先を見つめながら講堂へと走るのだつた。



第二部は、第一部に勝るとも劣らない盛り上がりを見せた。静真と統合したことによ

よつて、六人だつた部員は新学期とともにその数を増やし（その全員がステージに立つわけではないにしろ）、一年生はお世話になつた三年生へ精一杯のパフォーマンスを披露した。対する二年生は、最上級生となる準備ができていることを伝えようと、その成長を見せつけた。

花丸ちゃん率いる新生AZALEAは以前にも増して華やかな雰囲気となり、一方でG  
u  
i  
l  
t  
y  
<sub>桜内梨子</sub>  
K  
i  
s  
sを解散させることに決めた善子ちゃんは、これまでのG  
u  
i  
l  
t  
y  
K  
i  
s  
s樂曲メドレーと、作詞作曲衣装振付、全て一人で作り上げた渾身の一曲をその片翼に捧げた。善子ちゃんが熱心に作曲について勉強していた理由を悟った私は、柄にもなく大泣きしてしまつたのだけれど、それはこの際置いておこう。  
そして迎えた大トリ。

「それでは、最後の登壇者となりました。黒澤ルビイ先輩、よろしくお願ひします」

今日一番の大きな声援とともにルビイちゃんがステージの中央に立つ。

「お、みら僕かな」

「君の瞳を巡る冒険かもよ？」

「え、CYARON! の曲じやないの？」

青と白を基調にした、バリアジヤケットを思わせるようなロングコート。懐かしい衣装を見た私たちが小さな声で応酬する。

ルビイちゃんは、袖で待機する一年生からハンドマイクを受け取ると、小さくお辞儀をした。

「よつ、新部長！」

「ルビイちゃん頑張るビイ～！」

大トリともあって、観客私たちのボルテージも最高潮に達している。ルビイちゃんは少しはにかんで、千歌ちゃんと曜ちゃんに手を振り返した。そして何か決心したような顔つきで前へ向き直る。

「三年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます」

凛とした声が、講堂に響き渡った。

「まずは、この卒業ライブの企画に賛同していただき、また、参加していただきありがとうございました」

大きな拍手が鳴り、私たち三年生が各方面に軽く会釈をする。全員着席したことを確認するとルビイちゃんは続けた。

「この卒業ライブは、私のわがままから始まりました。どうしても、この場で披露したい曲があつて、部員全員にお願いをして、そして実現させることができました。部員のみんな、私のわがままに付き合ってくれて、本当にありがとうございました」

また大きな拍手。普段なら『ルビイちゃん先輩』と半分からかわれているような、後

輩たちとはそんな間柄のルビイちゃんだけど、今日は誰一人として茶化すものはいなかつた。

「な、なんかルビイちゃん、雰囲気違くない……？」

「し、新部長だから張り切つてるのかな……？」

いつになく厳かな雰囲気に千歌ちゃんと曜ちゃんも戸惑いを隠せずにいた。そんな二人を尻目に、ルビイちゃんは続ける。

「私、黒澤ルビイからはただ一曲贈らせていただきます。ですが、心を込めて、精一杯の思いを込めて歌います」

そしてルビイちゃんはハンドマイクを袖にいた一年生に返し、ポジションを確認する。準備が整い、一呼吸置いてから曲名を告げた。

「聞いてください、サクラバイバイ」

軽快なドラムの入りから始まり、シンセサイザーのイントロが流れる。瞬間、千歌ちゃんと曜ちゃんは——もちろん私も——すべてを理解したかのように目を見開き、二人は唇をかみしめた。目尻にはどんどん涙がたまっていく。

「はは、そつか、この曲か」

「こりやルビイちゃんには一本取られましたなあ」

震える声で絞り出したのは、せめてもの抵抗だつた。まだイントロの途中だというの

に、溢れる涙は止まらない。

一メロ。本来ならばルビイちゃん、曜ちゃん、千歌ちゃんの順に紡ぐものだつたそれは、それぞれがお世話になつた先輩を想起させる。と同時に、あの時流れた『三年生』の涙の意味がようやく理解できた気がした。でも私は、私だけは、ここで泣くまいと奥歯を強く噛みしめる。

一サビ。歌詞の通り、ルビイちゃんは泣かない。リズムに合わせて大きく手を振るその姿は実際に堂々としていて、これから迎える二度目の別れとしつかり向き合つているのがはつきりと伝わってきた。ハジマリとオワリ。ルビイちゃんが歌うことでもう一つの意味が含まれているようにも感じる。そう、オワリとハジマリは一つながりで、線など引けないのだ。

二メロ。あれから一年が経つた。あつという間だつた。私たちはついに“見送られる側”になつてしまつたのだと思い知らされた。いつだつたか、千歌ちゃんと曜ちゃんが不安そうな顔で言つていた。果たして自分たちは、ちゃんと先輩できているのだろうか、と。目の前にある今が、その答えなんだと思う。

二サビ。つい先ほどの会話が思い出された。知らず知らずのうちに、『三年生』の影を追つていた私たち。大好きだった。彼女たちに出会えていなかつたら、今の自分はなかつただろう。あこがれはずつと心に残つたまま、決して消えることはなかつた。

そして迎えるラスサビ。ルビイちゃんがダンスを止めてまっすぐ二人を見つめる。その透き通った翠眸は、一年前に見た赤青緑と重なって見えた。

曜ちゃんはもうルビイちゃんを直視できないでいた。ぐちやぐちやになつた自分の顔を、決意を固めた後輩に見せるわけにはいかないと両手で覆い隠し、下を向いて嗚咽を漏らしている。千歌ちゃんは対照的にしつかりとルビイちゃんを見つめ返していた。大好きな後輩の勇姿を一瞬たりとも見逃すまいと、とめどなく零れる涙をぬぐうことも、瞬きすらも忘れて。

「……」

歌い終わつたルビイちゃんがゆつくりとステージから降りて、私たちの目の前に立つ。声を殺して泣いている曜ちゃんと、優しい微笑みを浮かべる千歌ちゃん。そしてその二人を強く、美しく輝く瞳でしつかりと見つめるルビイちゃん。その時間は無限にも思えるほどゆつくりと、そして静かに流れていた。

「千歌ちゃん、曜ちゃん。こんなルビイと、二年間も同じユニットで活動してくれて本当にありがとう」

ヘッドセットを外したルビイちゃんの声が、講堂内に木霊する。周囲からもすすり泣く声がかすかに聞こえていた。

「何もできなかつたルビイに手を差し伸べてくれてありがとう。勇気が出なくて泣いて

た時にそつと背中を押してくれてありがとう。うまくいかなくて悩んでた時に夜遅くまで相談に乗つてくれてありがとう」

「うつ、ルビイちゃん…！」

曜ちゃんは椅子から崩れ落ち、ルビイちゃんに這い寄つた。ルビイちゃんの小さな手を強く握りしめる。ルビイちゃんも膝を折り、両手で曜ちゃんの手を優しく包み込んだ。

「曜ちゃんと一緒に衣装を作つたことも、千歌ちゃんと一緒に歌詞を考えたことも、三人で一生懸命振付を考えたことも、全部全部ルビイの大切な宝物です」

「……うん」

千歌ちゃんは膝の上でこぶしを作つていた。きつく握つているせいか、その白い手が余計に白む。でも、その淡く赤みがかつた瞳は、眼前に立つ仲間をしつかり見据え、小さく頷いた。

「ルビイの大切なものは、ずっとここにあります。絶対に消えたりなんかしません。だから、最後にこの言葉を贈りたいと思います」

——卒業、おめでとう。

三月、それは春の息吹を感じる季節。

三月、それはお世話になつた先輩に別れを告げる季節。  
三月、それは満開のサクラが舞い散る季節――